

お茶うけ 第44話

「人形との出会い」 - 市橋とし子 -

2月23日、いよいよ孫が生まれるという日の午後、私は「人間国宝 市橋とし子人形展」を観ていました。会場には、日本の人々の日常の生活の中に見られる、ごく自然な姿を写し取った人形が、「桐塑(とうそ)人形」を主体に、約110体(弟子の作品など約20体を含む)ほどが展示してありました。桐塑人形というのは、素材の桐塑と呼ばれる、桐の木のにおが屑(粉状)と生麸糊(しょうふのり)をこねた「練物(ねりもの)」を使って作った人形です。

会場に並んだ人形たちが暖かみを感じさせるのは、それぞれの人形が見せる何気ない身振りや遠くを見る視線に、子供や若い女性の心の動きを的確に捉えた表現があって、観る人の心を揺さぶるところにあるようです。

例えば、「溪間」という人形は、愛くるしい男の子が蓮の葉を頭に載せて、今にも溪川に飛び込もうとする姿を写し取っていました。目は伏目がちに下方の川面を見やり、膝をやや屈め、頭上の蓮の葉が落ちないように顎を緊張させている様子が、微笑ましく表現されていました。

また「未来を語ろう」という作品は、夕映えを浴びながら、おじさんと少年が並んで腰を下ろして話し合っている仕立てです。おじさんは両膝を立てて両手をその上に置き、目は遠くを見つめながら、何事かを少年に語りかけています。少年は、立てた片膝を両手で抱えて、やや顔をおじさんに向けて話に聞き入っています。二人の柔和な顔から、深く信頼し合っている気持ちが伝わってきました。



1940年(昭和15年)に、それまで家庭の主婦として暮らしていた市橋とし子は、近所の洋裁店で今村繁子の作った人形を観て、そのなんとも深い味わいに強く心を引かれました。これが、市橋と人形との運命的な出会いとなりました。今村に弟子入りした市橋は、「桐塑人形」の技術を学びますが、戦争が激しくなって、人形作りどころではなくなります。

そして、戦後の1949年(昭和24年)に、市橋は、路上で今村繁子と再び運命的な出会いをします。その場で今村に強く勧められて出品した「第一回 現代日本人形展」で、市橋の作品「午(ひる)下がり」が、特選第一席に選ばれました。続いて、翌年の「第二回 現代日本人形展」でも、作品「おしくらまんじゅう」が、特選第一席を受賞したことから、市橋の人形作り一筋の歩みが始まりました。

二度の不思議な運命的とも思える今村との出会いと、市橋自身の感性に合った素材「桐塑」との出会いが、市橋の人生を大きく変える契機となりました。しかし、市橋自身の人形作りの技法に対するたゆまない工夫と研鑽と、人を思いやる暖かい心と、作る人形を愛する心がなければ、折角の出会いを十分に生かすことはできなかったと思います。

会場の人形たちの一つ一つの姿が、観る人それぞれの心に、さまざまな出会いを思い出させているようでした。私も、一つの人形に、子供のころの出会いの思い出を重ねたり、別の人形から、これから生まれる孫との未来の出会いを先取りしたりして、楽しく鑑賞しました。孫は、私どもが病院に詰めている間には生まれず、帰宅した午後11時過ぎに、男子が無事に誕生したという知らせが入りました。

考えてみれば、人生は不思議な出会いに満ちています。市橋とし子の人形展の図鑑を見ながら、改めて出会いを生かすことの大切さを感じました。

(敬称略)

以上

参考資料:

『人形はだませない 人間国宝 市橋とし子人形展図録』

TBS刊 1998年2月11日

『人形はだませない - 市橋とし子 -』 田中館哲彦著

TBS刊 1997年3月10日 第一刷